

イワンの夢 ロシア

昔むかし、あるところに、商人がいて、息子がふたりありました。弟の名前はイワンといいました。

ある日、商人が息子たちにいいました。

「おまえたち、今晚夢を見たら、あしたの朝、わしに話しておくれ。かくしたりしたらひどいめにあわせるぞ」

つぎの朝、兄さんが父親にいいました。

「お父さん、ぼくは、イワンが十二羽のわしに乗って、空高く飛んで行く夢を見ました。それから、夢の中で、お父さんのお氣に入りの羊がいなくなりました」

父親はイワンに、

「おまえはどんな夢を見た」とききました。

「いえません」

イワンは、父親がどんなにおどしてもすかしても、どんな夢を見たのか話しませんでした。父親は腹を立てて、召し使いにいいつけ、イワンをまるはだかにして街道沿いの柱にしばりつけました。

太陽が照りつけて、のどはかわくし、お腹はすくし、イワンは死にそうになりました。

そのとき、ひとりの王子が、馬車に乗って通りかかりました。王子はイワンをかわいそうに思つて、縄をほどいてやりました。そして、馬車に乗せてお城に連れ帰りました。王子は、

「おまえを、柱にしばりつけたのは、だれなんだ」とたずねました。

「父親です」

「おまえ、何か悪いことをしたのか」

「いえ、見た夢の話をしなかっただけです」

「そんなくだらないことで、息子を柱にしばりつけるとは、なんておろかな父親だ。ところで、おまえ、どんな夢を見たんだい」

「いえません」

「なんだつて。ぼくは、おまえの命の恩人なんだぞ」

「それでも、いえないのです」

王子は腹を立てて、兵隊に命じ、イワンをろうやに放りこんでしまいました。

やがて、一年がたちました。王子は、うるわしのエレーナ姫に結婚を申しこもうと、遠い国へ旅立ちました。

ある日のこと、王子の妹が、庭を散歩していて、ろうやの側を通りかかりました。すると、イワンが王女を見つけて声をかけました。

「王女さま、どうかわたしをここから出してください。わたしの手助けがなければ、王子さまはうるわしのエレーナ姫と結婚できないし、それどころか、命を落とすか

もしれません。エレーナ姫は、とても悪賢いかたですから」
王女は、

「では、おまえは、わたしの兄さんを助けられるというのね」といって、すぐに、イワンをろうやから出させました。

イワンは、王子を助けるために、仲間を集めました。仲間の数は、イワンをふくめて十二人で、背丈も髪の色も声も、兄弟のようにそっくりでした。名前も同じ、イワンといいました。みんなは、同じ服を着て馬にまたがり、長い旅に出ました。

四目目に、深い森にやって来ました。すると、森のおくから叫び声がしました。イワンが馬から下りて見にいくと、小さな原っぱで、三人のじいさんたちが言い争っていました。イワンは、

「こんにちは。おじいさんたち。けんかのもとはなんですか」とききました。

「やあ、若い衆。わしらはおやじから、三つの宝物をもらったのさ。かくれ帽子と空飛ぶじゅうたんと、いだてん靴だ。だれが何をもらうか、もう七十年も争っているんだが、まだうまく分けることができないんだ」

「じゃあ、わたしが分けてあげましょうか」

「それはありがたい」

イワンは、三本の矢を別々のほうに放って、いいました。

「最初に矢を持ち帰った人がかくれ帽子を取り、二番目に持ち帰った人が空飛ぶじゅうたんを取り、三番目の人がいだてん靴を取るといいでしょう」

じいさんたちは、矢を追いかけてかけだしました。

イワンは、宝物をぜんぶかえて、仲間の所にもどりました。

「さあ、みんな。馬はここに置いて、空飛ぶじゅうたんに乗ってくれ」

十二人はすばやく空飛ぶじゅうたんに飛び乗りました。そして、王子の後を追って、うるわしのエレーナ姫の国をめざして飛び立ちました。

都に着くと、みんなは王子の屋敷に行きました。そして、料理番や馬丁になって、王子に仕えました。

ある日、王子は、りっぱな着物を着て、うるわしのエレーナ姫のお城に出かけて行きました。エレーナ姫は、王子を客間に通し、ごちそうでもてなしていいました。「なんのご用でいらつしやいましたか」

「ああ、うるわしのエレーナ姫。結婚のためにやって来ました。わたしの妻になってください」

「では、課題を三つ出しましょう。それをぜんぶなしとげられたら、わたしはあなたの妻になります。さもなければ、あなたの首を切ります」

エレーナ姫は、ひとつめの課題を出しました。

「あした、わたしのもとに、ある品物が届けられます。それが何なのかは内緒です。あなたは、それとそっくり対になる物を持ってきてください」

王子は、悲しみに暮れて屋敷にもどりました。イワンが、

「王子さま、何を悲しんでいるのです」とききました。

「エレーナ姫が、だれにも解けないような難題をふっかけてきたのだ。あした、エレーナ姫のもとに届く品物と、そっくり対になる物を持って行かなければならないんだ」

「それは大したことではありません。神さまにお祈りしてお休みなさい。朝になればいい知恵が浮かぶでしょう」

イワンは、かくれ帽子をかぶっていただてん靴をはき、まっしぐらに、うるわしのエレーナ姫のお城に出かけていきました。そして、エレーナ姫の寝室に入って行ってこっそり見ていました。

エレーナ姫は、侍女に、上等の布を渡していいました。

「この布をくつ屋に持って行って、わたしの足に合うくつを片方だけ、大急ぎで作らせなさい」

侍女が出かけると、イワンもついて行きました。

くつ屋はすぐに仕事にとりかかり、片方のくつを仕上げて、まどべに置きました。イワンはそのくつをぬすんでポケットに入れました。くつ屋は、作ったばかりのくつが急に見えなくなつたので、たいそうおどろきました。

「悪魔のいたずらかも知れないぞ」

くつ屋は、しかたなく、また針を持ち直して、もう一度くつをこしらえました。

エレーナ姫は、くつを受けとると、仕事台に向かって腰を下ろし、くつに金糸でぬいとりをしたり、大粒の真珠をぬいつけたり、宝石をちりばめたりしました。イワンはその横にすわって、ポケットからもう片方のくつを取りだし、同じように金糸でぬいとりをしたり、真珠をぬいつけたり、宝石をちりばめたりしました。

仕事が終わると、エレーナひめは、にっこりわらって、

「明日、王子さまは、何を持ってくるかしら」といいました。イワンは、心の中で、
「まあ、見ていらつしやい」といいました。

つぎの朝、イワンは、王子にくつをわたしていいました。

「エレーナ姫のお城に行つて、このくつをお見せなさい。これがひとつ目の課題の答えです」

王子が着飾つて、エレーナ姫のお城に入つて行くと、貴族や大臣たちが待ちかまえていました。エレーナ姫は、美しくくつを取りだして、王子を見てにっこり笑いしました。王子は、

「きれいなくつですね。でも片方だけでは役に立たない。もう片方さしあげましょう」といって、ポケットからくつを取りだし、テーブルに置きました。周りの人たちは、手をたたいてさげびました。

「この人こそ、わたしたちのうるわしのエレーナ姫の夫にふさわしい」

けれども、エレーナ姫は、

「まだふたつ目の課題があります」といいました。「こんども、わたしに届くものと

対になる物を持ってきてください」

王子は、悲しみに暮れて屋敷にもどりました。イワンは、

「王子さま、何を悲しんでいるのです」とききました。

「あしたも、エレーナ姫のもとに届く品物と、そっくり対になる物を持って行かなければならないんだ」

「それは大したことではありません。神さまにお祈りしてお休みなさい。朝になればいい知恵が浮かぶでしょう」

イワンは、かくれ帽子をかぶっていだてん靴をはき、まっしぐらに、うるわしのエレーナ姫のお城に出かけていきました。

エレーナ姫は、侍女に、

「大急ぎで鳥小屋に行つて、雌の鴨（かも）を一羽持つて来ておくれ」といいつけました。

侍女が鳥小屋へかけ出したので、イワンもついて行きました。侍女が雌の鴨をつかまえると、イワンは雄の鴨をつかまえました。エレーナ姫は、雌の鴨を受けとると、仕事台に向かつて腰を下ろし、鴨の羽をリボンで飾り、ダイヤモンドをちりばめました。イワンはその横にすわつて、雄の鴨に、同じようにリボンやダイヤモンドをかざりました。

つぎの日、王子がエレーナ姫のお城に行くと、エレーナ姫は、かざりたてた鴨を放して、にっこり笑いました。王子は、

「ほら、ここに、あなたの鴨の連れがいます」といって、雄の鴨を放しました。周りの人たちは、手をたいてさげびました。

「この人こそ、わたしたちのうるわしのエレーナ姫の夫にふさわしい」

けれども、エレーナ姫は、

「まだ三つ目の課題がありますよ」といいました。

王子は、悲しみに暮れて屋敷にもどりました。イワンは、

「神さまにお祈りしてお休みなさい。朝になればいい知恵が浮かぶでしょう」といいました。

イワンは、かくれ帽子をかぶっていだてん靴をはき、うるわしのエレーナ姫のお城に出かけました。エレーナ姫は、馬車に乗つて、まっしぐらに海に向かつて走つて行きました。イワンは、ひと足も遅れずについて行きました。

エレーナ姫は、岸に立つて、

「わたしのおじいさま。わたしよ。エレーナ姫よ」とよびました。すると、海がざわざわと波立ち、水の中から金のあごひげと銀の髪の毛の老人が現れました。老人は、

「かわいい孫娘や。わたしの髪をすいておくれ」といいました。そして、エレーナ姫のひざに頭を乗せ、すやすやと眠ってしまいました。エレーナ姫は、老人の頭から、銀の髪の毛を三本、そつと抜き取りました。イワンは、後ろから、老人の髪の毛

毛をひとつかみ、むずと引き抜きました。老人は目を覚ましてさげびました。

「痛い。何をするんだ」

「ごめんなさい。髪の毛がすっかりからまつていたものですから」と、エレーナ姫はいいました。

老人は安心して、またいびきをかき始めました。エレーナ姫は、老人の金のあごひげを三本抜き取りました。イワンは後ろから、金のあごひげをぐっとつかんで、一本残らず引き抜きました。老人は、悲鳴をあげて、海に飛びこんでしまいました。つぎの日、エレーナ姫は、三本の銀の髪の毛と、三本の金のあごひげを王子に見せていいました。

「こんなにふしぎな物を、見たことがありますか」

王子は、

「そんな物、お望みなら、ひとつかみでもさしあげますよ」といって、銀の髪の毛と金のあごひげをひとつかみずつさし出しました。

エレーナ姫は。腹を立てて、寝室にかけこみ、まほうの本を開いて、王子が自分で難題を解いたのかどうか調べました。すると、かしこいのは王子ではなくて、王子に仕えるイワンだということが分かりました。エレーナ姫は、客間にもどつて、王子にいいました。

「あなたのお気に入りの家来をよこしてくださいな」

「十二人もいますよ」

「イワンという名まえの家来です」

「みんなイワンという名前なんです」

「ええ、いいわ。みんなここへよこしてくださいな」

まもなく、王子の十二人の家来が、お城にやって来ました。十二人は、顔つきから背丈、髪の毛の色、声まで、そっくりでした。エレーナ姫は、

「この中で、だれが一番年上なの」とたずねました。すると、みんなが声をそろえて、

「わたしです」と答えました。そこで、エレーナ姫は、金の杯をひとつとふつうの杯を十一個用意させました。そして、ワインを注いで、十二人にすすめると、みんなが金の杯を取ろうとして大さわぎになりました。どうしても、だれが本物のイワンか分かりませんでした。

夜になって、十二人がぐっすり眠ってしまうと、エレーナ姫は、まほうの本を持つて来て、すぐに本物のイワンを探しだしました。エレーナ姫は、イワンのこめかみの毛を少し切り、

「明日、この目印で見つけ出し、死刑にしてしまおう」と思いました。

あくる朝、イワンが目覚まして、頭をさわってみると、こめかみの毛が切られているのに気付きました。そこで、すぐにとび起きて、十一人を起こしていいました。

「みんな、こめかみの毛を切るんだ」

しばらくすると、エレーナ姫が、十二人を呼び出しました。すると、全員のこめかみの毛が切り取られていました。エレーナ姫は、腹を立てて、まほうの本をだんに投げ込んでしまいました。

こうして、エレーナ姫はもういい逃れをすることができなくなって、王子と結婚式をあげました。国じゅうの人たちが、三日三晩、お祝いをしました。

王子は、エレーナ姫を連れて国に帰ることになりました。イワンたちは、先に出発し、町はずれまで来ると、まほうのじゅうたんを広げて乗りこみました。じゅうたんは、雲よりも高くまいあがり、ぐんぐん飛んで、あの深い森の中の小さな原っぱに下りました。ちょうどそこへ、じいさんのひとりが、矢を持って走って来ました。イワンはじいさんに、かくれ帽子をわたしました。つづいて、二人めのじいさんが矢を持って走って来ました。イワンはじいさんに、空飛ぶじゅうたんをわたしました。三人目のじいさんも、矢を持って走って来ました。イワンは、いだてん靴をわたしました。それから、十二人は、馬に乗って、王子の国に帰りました。

王子の妹は、イワンの話を聞くとよろこんで、

「ほうびに、何をあげましょうか」とききました。

「わたしを、もとの牢屋に入れてください」

王女はおどろきましたが、イワンがどうしてもいいはるので、また牢屋にとじこめてしまいました。

やがて、王子がうるわしのエレーナ姫を連れて帰って来ました。王子は、

「わたしのイワンはどこにいるんだ」とききました。

「牢屋にとじこめてあります」と、大臣たちが答えました。王子が、

「だれが、牢屋に入れたのだ」ときくと、王女が、

「夢の話をしないので、お兄さまが腹を立てて、牢屋に入れたのではありませんか」といいました。

「あの男がイワンだったのか」

王子はすぐに、イワンを連れてこさせ、イワンを抱きしめてあやまりました。イワンはいいました。

「じつは、あなたの身の上に起こったことを、わたしは前もって知っていたのです。すっかり夢で見たのですから。だから、あなたにも、夢の話をしなかったのです」

王子は、イワンを大将にして豊かな土地を与え、お城に住まわせました。イワンは、父親と兄さんと呼び寄せて、みんな仲良く幸せに暮らしました。